

先輩の肖像

10年後の君たちへ

市井に寄り添い骨太貫く

は不要だが、カラーB5判の40ページには豊富な話題が並ぶ。ステンドグラスを自作する物づくりの達人、慰問演奏するハワイアンバンド、行政の課題など。広告主の宣伝記事があふれる通常のフリーペーパーとは異なる骨太な誌面が特徴だ。

「ザ・淀川」は淀川区の約9万世帯に戸別配布する。広告が収入源で購読料

強い日差しが照りつける8月下旬の昼下がりに。阪急三国駅に近い大阪市淀川区社会福祉協議会の駐輪場に自転車が滑り込んだ。「小回りが利くので区内の移動はこれが一番です」。月刊タウン誌「ザ・淀川」の編集長、乃美（のうみ）夏絵さんは笑顔で汗をぬぐった。橋下徹市長が進める歳出カットで地域がどう変わるのか、現場の職員に話を聞くのがこの日の目的だ。

「交付金が減らされることの影響は？」。着席するや事務局長に直球の質問をぶつけ、回答に耳を澄ます。相づちを打ち、時折「具体的にには？」と突っ込みながら、ノートにペンを走らせる。取材は一時を超え、最後は理想の地域の在り方にまで話は及んだ。



「ザ・淀川」編集長 乃美 夏絵さん (30)

妹誌「ザ・おおさか」（大阪市北部を対象、2009年3月号で休刊）を読んだ衝撃を受けた。「見知った身近な商店街のおっちゃんだ、こんなおもしろい経歴だったなんて」

読むほどに記事の奥深さに驚き、憧れた。海外に行かなくても、身近にすてきな人や場所がある――。ザ・淀川の編集部で電話をすと、初代編集長の南野佳代子さんに「3カ月だけ来てみる？」と誘われた。初めて原稿で取り上げたのは、長崎から北区に伝わった伝統工芸「天満切子」。



西アフリカのギニアを訪れ太鼓とダンスを学んだ（右から2人目が乃美さん）

「ザ・淀川」編集長 乃美 夏絵さん (30)

たネタだ。大阪にも切子職人がいることが新鮮で、切子を扱う店主にお願いして工房にも足を運んだ。「おもしろかった」という読者の声に励まされた。

「最初は失敗の連続でした。大阪にも切子職人がいることが新鮮で、切子を扱う店主にお願いして工房にも足を運んだ。『おもしろかった』という読者の声に励まされた。」

「ザ・淀川」編集長 乃美 夏絵さん (30)

翔